

サステイナビリティと日本のコード

山下晃平（京都市立芸術大学、非常勤講師）

「サステイナビリティ（持続可能性）」という用語は、地球環境や食糧危機などの喫緊の課題と関わりながら、近年、様々なメディアで取り上げられている。とりわけ 2015 年の国連において掲げられた「SDGs：Sustainable Development Goals」という国際目標によって、サステイナビリティは企業活動や評価により直結する指針にもなっている。日本国内に目を向けると、企業活動における資源の再利用やエコシステムの構築、あるいは研究機関でのサステイナビリティ学の推進という動きがある。またテレビや雑誌等を通してエコグッズや暮らしのアイデア紹介も盛んである。しかしながら伝統文化や風土、あるいは祭礼への関心も見られる点が特徴的である。果たしてこのサステイナビリティが示す「持続性」とは、どのように定義されるのか。

本研究では日本のコード、すなわち文化の基層構造に関する研究を手がかりに、サステイナビリティの概念に潜在する地域的特性、すなわち日本的性質とその意義について考察したい。とりわけ外来文化の移入に関する「ウチ/ソト」の概念や、思想史家の丸山真男が提唱した「永遠の今」という歴史意識の基底範疇、あるいは「不完全性」とその受容という日本の美的属性に関する理論が参照される。このような日本文化の基層構造を踏まえると、国際的な共通項とされるサステイナビリティは、文化的性質としての「古層」が隆起することで記号的に受容され、「未完の持続性」という日本的性質へと変質するのではないか。実際に「サステナ」という言葉が、熊野詣や聖地巡礼あるいは芸術祭と結びつく状況を確認することができる。

人新世にも関連して、サステイナビリティ（持続可能性）は、人間中心主義や資本主義的な経済発展の手段の一つになるという側面も議論されている。このようにサステイナビリティの概念は多様化し、曖昧化しているが、本研究が示すように、地域的共同体の基層構造を捉えることで、その真正性を見出すことができる。

参考文献

池田寛二「サステイナビリティ概念を問い直す—人新世という時代認識の中で」『サステイナビリティ研究』9 巻、法政大学サステイナビリティ研究教育機構、2019 年、7-27 頁。

小林修一『日本のコード 〈日本的〉なるものとは何か』みすず書房、2009 年。

丸山真男「歴史意識の「古層」」、丸山真男（編）『日本の思想六 歴史思想集』筑摩書房、1972 年、3-46 頁。

Thiele, Leslie Paul. Sustainability, 2nd ed. Cambridge, UK: Polity Press, 2016.